

主催：木場の郷土を愛する会



黒崎中学校美術部が描いた木場城(想像図)と木場の棒踊りの屏風



木場城を木場の人々がアートで甦らせる—木場城美術展—

自らの歴史を自らの手で、いま流行のアートを使って、津崇之(書)、故・佐藤勇(写真)、宗村称光(書)、一箭憲光(ドローン映像)、亀倉芸(金工)、山際マリエ(絵画)、高橋郁丸(絵画)、基村英行(アニメーション)、黒崎中学校美術部(屏風絵)

テーマは「木場城」。木場城は、戦国末期、今の新潟市西区木場にあり、上杉家の下越の最前線基地で、越後統一、新潟湊の運営等を担ったが、1598年、上杉家の会津移封により廃城となった。城跡と想定される場所は田園が広がり、痕跡や遺物はなく、詳細はわからない。廢城420年、新潟港開港150年を控え、木場城を甦らせようと、木場の人たちや黒崎中学校美術部がテーマに沿って書、絵画、工芸、写真、民具、映像、屏風などのアートを創作し、広く知ってもらうために『木場城美術展』を開催した。また、会場は上杉家と因縁の深い甲斐の武田家にルーツがある「武田家」(新潟市指定文化財)にした。

出展者は、生まれ、在住、嫁婿、ゆかり等の以下の人たち。山際辰夫・山際ハツ(民具)、柏繁行(陶芸)、島

津崇之(書)、故・佐藤勇(写真)、宗村称光(書)、一箭憲光(ドローン映像)、亀倉芸(金工)、山際マリエ(絵画)、高橋郁丸(絵画)、基村英行(アニメーション)、黒崎中学校美術部(屏風絵)

会期は、8月18日(土)から9月2日(日)まで、延べ15日間で400人ほど(記帳者351人)が来場した。遠方からいらした方もいた。作品はもとより、武田家やまいぶんポート(新潟市文化財センター)、周りの風景など好評であった。

地道に創作活動をしている地域の方々の発表の場になり、それらの人に光をあてることができた。なかでも黒崎中学校美術部が制作した木場城屏風は、大変な力作であった。展示した屏風等のアートは、事業終了後、大字木場に寄贈され、黒崎市民会館や木場公民館、木場芸能音楽祭等で展示された。地域に大きな宝物ができた。(文:五十嵐)

●8月18日(土)~9月2日(日) 木場城美術展(武田家)

 水と土の芸術祭
Water and Land Niigata Art Festival 2018

市民プロジェクト2018アーカイブ 063